

の同參會の席上で何とかする様幹事の方には通報連絡した、四十余日に涉る巡敎中十月十三日室蘭の御借僧先き近くにて、既に御遺骸は上り荼毘に附して帰られた事も承り、まだく上らぬ遺骸も澤山あるのにせめてもと安堵の胸を撫で落ろし、遙かに不幸中の幸と合掌申上げたのであつた。惟ふに北海道は從來台風には絶対的に迄縁なき物と今迄の開拓入殖者一同は放任し安心觀もあり油斷もあつた様である、處が今度の十五號台風は農作物はおろか果樹園藝を始め、山野の林木は盡く逝つて終つた、田畠作物は又來年と云ふ年次はあるが林檎や櫻桃乃至は倒潰林木はまづ一生一代の災難である。岩内町の大火も確かに特ダネニユースであつたが、世紀の大海難事件としての洞爺丸に全人氣を奪れて終つた形である、噫呼慘しい哉。

一千二百有餘、靈。 忽チ化ス海中惡鬼、靈一

十五、業風何、所作ゾ。 教シム人ヲシテ萬世弔ハ精靈ヲ。 聲。

桑山良晃君の死を痛む

可睡齋後堂 鬼頭觀梁

此の有爲の青年僧を亡したことは返す返すも殘念だ、私が可睡齋へ安居すると間もない一日非思量の境地を問はれたから、それは只管打坐の當所であると答へ専ら參禪せられるよう勧めた。其後僅か十五日間位過ぎた朝突然送行を願はれるから、私は自坊に何か要件でも出來たかと云へば、實は師僧が獨りで苦しい經濟をやつてゐるから氣の毒に思い自分も教員にでも成つて師僧の經濟を助けたいと思ひます。兄弟があり貧寺ゆえ可睡に安居して、おれはいつ迄も親の躊躇すねかぢりだからのこと、所謂獨立の生活を立ようと云ふ精神だ。

私はこれを聞いて孝道心に感心した。左様な理由ならば止むえぬ實は可睡齋も今後は坐禪を専門に人材を打出したいから君のような道心家に居て貰いたいが致方ない『日下挑燈萬松嶺水中捉月古澗溪莫忘門外送君處芳草野花路欲迷』此の偈を呈して別れたが、今思ふと宗風地に隨おちた今日此の青年を失つた事は誠に宗門の損失である。噫ああ

追悼記

逗子市沼間海寶院主 畑忍定

二十五年駕ル願船。隨波逐レ浪掉二學汀。 莫言身跡既過去。 月在二蒼天一不レ在瓶。 心身得二萬藏慈雲ヲ。 傾ケ心頭ヲ孝行ニ親ム

仁。 幻化色身學域托。 得塞苦一未タ發ニ薰香。 面接眞情兄弟思。

學事英敏塞梅枝。 想起ヒス心胸悅ニ學秀。 可レ借成均他界ニ移。 一

別相思、善容、姿。 寒梅開花自力ヲ嬉。 欲問ント遠友一海底去。

千辛萬苦成學遺。 精光諦進如晴天。 天祐明月照ニ流川。 學勵得

實遺ス自力。 鐵心堅固行道鮮。 得ニ親情ニ二十五年。 丹心學道水泡鱗。 洞爺遭難時難シ逃。 不知ニ我涙ニ到ニ重泉ニ。 生存心頭道情濃。 學事英敏立高峯。 行道得レ達失ニ正徳。 洞爺遭難化ニ海龍。

香煙

横須賀市大松寺前住職 鈴木雷峰

法語

魏シテ化城一歸ニ寶處一時 電光石火モ不レ皓レ追フ
神通用ヒ盡スモ迂回甚 事定チ蓋フ棺ヲ堪タリ作レ奇

恭惟

大圓寂。洞爺良晃和尚。假ニ借シテ四大ヲ。以テ爲ス一生ト二十三
歡世線已畢。死也不レ赴カ泉下ニ。生也不レ假ニ胞胎ヲ。
處々遊戲三昧ナリ。即今眼光落地、時還到ニヤ這箇ノ境界一塵。露。
試向テ炉中ニ通ズレバ一氣ヲ。擔香煙淡ヲ散ス清風ニ。

通夜弔歌

焚く香の煙の中に面影を仰ぐはいとど悲しかりけり

大松閑居八十三翁

め揚子江のソ江作戦の第一線に次々と上流地点の要所を占領し敵々
の武勳の状況を時々知らせて來ました。然し現地は必ずしも左に非
ず、彼は父母に心配をかけまい一念からであつた。昭和十四年十月廿
二日付で二枚の葉書が一度に舞込み、何時もの状況と合せて、この手
紙の着く頃には望みの武漢三鎮は陥落して居る事と思ふ、ニュース
で情報を御覽下さい萬歳を願ひます両親によろしくと強く走り書き
してあつた。その夕食時である電報があり戦死の通報があつた。やが
て三十六日目に遺骨は名古屋驛に歸還した。こゝで出迎へた瞬間初
めて彼の死を眞實として、抑へ切れぬ想ひであつた。追て本葬儀に慰
靈祭等にその都度盛儀は新聞に詳しく速報された。親内に取つては
この新聞こそ生涯幾萬枚中見る中の數紙であるとし所持して居ります。
見る度に追憶新たに感じます。今度の記載新聞記事を桑山氏へ
送つたのも、想ひ出の過程が類似して居る様に思つたのでお送りし
た譯である。

御葬儀参列寺院中で私より案内させて載きました方は曹洞宗第六
教區十六ヶ寺と宗務所長、市内各宗教會十七ヶ寺で何れも参列さ
れ、特に東福寺徳壽院良長院では奥様共に御焼香がありました。

法友の死を悼む

熱海市泉保善院住職 平田哲藏

法友良晃和尚は桑山晃道師の長男に生れ禪僧の面目を修められた
姿で歸還される事となり私も上野驛迄出迎へました。若い方であれ
ば猶一層お氣ノ毒でありまた御遺族の心中深く痛みました。國鐵に
關係がある事とは云へ上野驛ではこれが取扱ひの丁重さと關係者と
一般焼香者の多い事に驚いた。

さて今回のお迎へに當り心中思ひ當る事を述べさせて頂きます。

これは亡き實弟の事で支那事變の際海軍部隊として上海上陸戰を初